

文化行事

甞れゴゼの唄

記念講演、基調報告とつづいた開会全体会でしたが、アトラクションとして企画された「越後賢女（ゴゼ）唄」の上演は、参加者の緊張を一挙に解き放ちました。竹下玲子さんの演ずる祭文松坂「葛の葉子別れ」の哀調には、思わず涙する人たちの姿も見られました。

越後賢女は、かつて村から村に唄声をひびかせた盲目の女旅芸人です。その物語唄は日本の文芸の源流を伝え、その流行唄は各地の民謡のゆりかごととなっていたのでした。

竹下玲子さんは長崎の出身だそうです。東京声専音楽学校を卒業後オペラ歌手をめざして勉強中に、無形文化財「最後の賢女」小林ハルさんにめぐり合ったといひます。そしてその芸に深く心を惹

かれ、新潟県黒川村の盲老人ホームに通って小林さんに師事しました。彼女は今日本にたった一人しかいない暗眼の賢女として全国を巡演していますが、東京武蔵野芸能劇場の「ふるさとの語り部」に出演して、厚生省児童福祉文化審議委員会の推薦を受けました。また昨年は賢女唄修業十年を記念、新潟音楽文化会館でリサイタルを催し絶賛を浴びています。竹下さんの演ずる美しい唄声は、年配者には何か懐かしい故郷のぬくもりをよみ返らせ、若者には故郷の文化との新鮮なめぐり合いの感動を与えてくれます。

童話作家、松谷みよ子さんは、竹下さんを次のように紹介しています。

「私たちはトキという鳥が、いま絶滅に瀕していることを知っています。うすい紅いろの美しいトキの学名はニッポニア・ニッポン。かつてはたくさん、日本の空を飛んでいました。

しかし、ゴゼ唄と呼ばれる日本の女語りか、かつて日本の働く人びとの心をどればど慰め、ぬくもらせたとかを、そのゴゼ唄がいまどうなっているかを、知る人

は少ないように思います。私たちは日本にある美しいもの、貴いものをあまりにも気軽に葬り去ろうとしているのです。

竹下さんはこのゴゼ唄のたつたひとり継承者です。アルバイトをしては新潟の盲老人ホームに通い、最後のゴゼの小林ハルさんからゴゼ唄を学びました。まるで祖母と孫娘のように……。だれに頼まれたのでもなく、ただゴゼ唄が好きでたまらないからそうしたのです。

そして十年。いま竹下さんの唄声は、「貧乏神福の神」など新しい語りとなつて、幼い子の心をゆすります。いまでもあの唄をうたっているのよ、私はよくお母さん方から聞くのです。

そしてまた雪ふりしきる山形の宿に、竹下さんの語るゴゼ唄「葛の葉子別れ」を聞きたいと集まってきた人びとの姿を私は忘れることができません。

りんとはりつめた竹下さんのすばらしい唄声は、私たちに忘れていた大切なものを思いださせてくれます。どうか新しいゴゼ唄のひびきが日本中にとどきますように……。」（「甞れゴゼの唄」より）